D	E	F	G	H
50歳代 課長級	50歳代 課長級	50歳代 課長補佐級	50歳代 課長補佐級	50歳代 課長補佐級
	・チームメンバーに調査 ・研究について理解の深い人を入れグループ討議の中で気づきをさせる ・常に研究的な姿勢の重要性について述べる		・上司、他課職員へ調査・研究の意義を説明した	・担当している業務の整理をすることによって、今何が課題か、課題解決に何が必要かを知ることが調査研究の必要性の理解につながる
・市町村別に情報提供が出来るようなシステム とする ・保健福祉年報等を情報源として活用できるようにする	・明らかにしたい課題が共有化できるよう場を設置する ・研究テーマに関する情報や資料を常日頃から収集・整理しておく	・地域の課題の中から研究テーマを意識する必要がある	・他業務担当保健婦に対して情報提供するよう依頼した	・グループワーク等で健康問題の原因・背景について把握するための手順・技法などを身につけていく
・目的・目標の設定にあたって、文献要約を作成する		・調査・研究のテーマを絞る ・限られた時間内で終了できるテーマを設定する		・何のための調査研究かを繰り返し確認し合うことが大切である
・既存の調査用紙があるかどうかを確認する ・調査票を作成する際、専門家の助言が望ましい	・調査項目について、添削する	・調査・研究に関する研修は、演習を含んだ実践的研修が必要である	・調査項目の選択について、大学の協力を得る ・調査内容を深めるため、担当保健婦以外の人の声を聞く	・調査票は調査対象者が迷わず記入できる文章表現が必要である
・何を検討したいか明確にし、それに基づいた分析を行う ・パソコン操作ができるようにする必要がある	・分析では、目的に応じているか常に問いかける		・目的が明確になるように分析をする ・分析の解釈について表現の仕方を工夫する	
・結果を日本公衆衛生学会誌等に提示する	・まとめるにあたって、本人が主張したいことが表現できているか確認する	・まとめにあたっては、スタッフだけでなく指導者も参画し、力量を高める ・調査結果を関係団体・機関に報告することにより、具体的な業務に生かしていく	・調査結果を報告することで保健所保健婦業務を理解してもらう ・結果のまとめかたについて、専門家の視点から助言をもらった	
・事務職・管理職の理解を得る(決済を取る結果の説明をする) ・保健婦は必ず研究することを提案する ・学会発表をすることにより研究をする意味を理解する	・年一回の研究発表が保健婦の調査・研究の動機づけとなっている ・研究費は県レベルで予算化されている ・調査・研究の担当者を決め、推進役を務める	・管理者は保健所の業務上活かす調査・研究をスタッフに動機づける役割がある ・調査研究を日常業務にフィードバックすることが大切である ・研究費として国・都道府県補助を利用する	・各種業務の中で今なぜ母子保健関係を取り上げるのか上司に説明した ・協力、指導者として医科大へ要請した	・調査・研究相談窓口が必要である

表３－６　３　スタッフ保健婦として役立った指導・助言内容

	A 20歳代 保健婦	B 30歳代 技師	C 30歳代、40歳代 主任技師
A 調査・研究の意義 1.調査・研究する必要性・意味を理解している 2.調査・研究の位置づけが明確である	・討論により保健婦間での研究の意義が共有できた		
B 問題の把握と明確化 1.地域におきている現象・問題を感じとる 2. 現象・問題が生じた背景、原因を把握する 3.問題間の関係を整理し、総合的にとらえる 4.問題の中から解決すべき課題を特定する 5.課題解決に関連するデータ・情報を収集する 6.文献、関係者などを通じ既知の情報を調べる	・看護協会の図書室の利用ができた ・研修で文献検索の仕方を学んだ		・地域での衛生統計等を把握する ・情報検索の方法 ・過去に調査されている文献や既存の調査報告書を検索する ・解決すべき課題の特定について助言を受けたい ・調査・研究のネットワークをつくっておく
C 目的・目標の設定 1.課題を調査・研究のテーマに結びつける 2.調査の目的・目標を具体的に表現する 3.調査・研究によってどのような結果が得られそうか予測する	・まず、実態を把握して仮説を導き出すよう指導された		・文献等を踏まえ、実施可能な調査の目的・目標の具体化に対する助言
D 調査の実際 1.研究の対象者を選択する 2.目的にあった調査・研究方法を選択する （統計調査か事例調査か） 3.目的に応じたデータ収集の方法を選択する （観察法か質問法か等） 4.目的に応じた調査表等を作成する 5.予備調査等の結果により方法や内容を修正する	・研修で研究のデザインを学び、自分のテーマについて検討し実践した	・先を見て、助言してくれる	・調査協力機関の受け入れやすい方法をとる ・調査内容についての具体的な指導助言を受けたい ・調査の関係者以外の人から調査票に対する意見をもらう
E 結果の分析と解釈 1.目的に応じて収集結果を分析する 2.目的に照らして明らかになった事柄を示す 3.調査結果と分析結果を解釈する	・データの出し方を細かく指導された ・どの群を活動のターゲットにするかを事前に決定し、それを基に結果を出した		・正規分布、有意差検定等分析方法の選択について ・対象が多い場合の分析方法
F 結果のまとめ 1.目的から結果まで論旨が一貫している 2.わかりやすい、読みやすい文章・図表を作成する 3.報告書を作成する 4.結果を地域住民、関係者に報告する 5.結果を研究誌等に発表する 6.結果を保健計画や事業計画等に生かす	・具体的に文章・図の作成について個別に指導を受けた		・図表作成におけるパソコンの活用について ・第3者が理解できるようなわかりやすい報告書の作成
G 調査・研究のマネージメント 1.取り上げる課題の意義を周囲に説明する 2.調査・研究計画書を作成する 3.調査・研究の円滑な実施に向け、職場内の合意形成や進行管理する 4.調査・研究を保健婦業務として位置づける 5.研究費の予算化ができる 6.調査・研究の指導者の協力を得る 7.研究的視点から業務の評価が行えるよう後輩を指導する	・医大・看大の教授による個別指導を受けた		・予算の段階から、依頼する内容・額等企画の中に入れ込んでおく ・所内を横断的なプロジェクトチームの結成 ・職場以外の専門家からのアドバイスが欲しい ・研究予算化のための具体的指導がほしい ・研究に伴う予算の執行は専任者が必要である ・計画作成には予算も含める ・調査・研究に関連する人材の確保、ネットワークづくりが大切である

D	E	F	G	H
30歳代 技師	30歳代 技師	スタッフ4人	30歳代、40歳代 主査、保健婦長	40歳代 保健婦、主任保健婦
・調査研究の必要性、意義に充分時間をかけて検討する事が必要				
・調査前に文献をよく読む ・身近なところで、国内、外国における文献を多く備え、情報提供してくれる所(看護大学)が必要だと思う ・課題を明確化するための助言を受けた	・問題解決に関するデータ・情報が知りたい ・テーマに関する先行研究を知りたい		・助言者と話し合う中で課題を明確にすることができた	・実態の図式化 ・問題が見えるような図式化 ・データの図式化 ・調査研究の実施要項の確認、実態調査のデータ活用
・結果を予測して調査・研究を実施していくことが重要 ・1人の予測では限界があり、総合的な立場から助言してくれる人が必要だと思う	・予測される結果に関する助言がほしい ・目的に応じたデータの収集について指導を受けたい ・テーマに関する先行研究を知りたい		・常に調査の目的・目標にたち返り、調査研究を進めていくことが必要	・自分達が知りたい内容が明らかになるような調査についてアドバイスが欲しい ・上司の広い視点からの助言
・目的に応じた調査内容にするためにも目的を十分に検討することが必要である ・目的、目標、対象者の選択の部分には特に指導者による助言が必要である ・対象者が調査項目を理解できるか吟味の必要がある ・情報処理研修が役立った ・統計に関する研修は、調査事例を基に行う必要がある	・調査プロセスに応じた助言がほしい		・調査票作成の段階で上司からの助言をもらう	・具体的事例にあわせての指導、助言 ・事例紹介、評価表をレーダーチャートにする ・カルテからデータ分析を行う
・調査・研究の経験により、データの読み取りが広がった ・保健所以外の調査スタッフの意見により、結果の解釈が広まった			・コンピュータ操作に慣れておらず援助を必要とする ・助言により、目的に応じた分析視点が確認できた ・結果の解釈について他の職種の意見を聞くと深まる ・結果の解釈について十分時間をかける必要がある	・具体的なデータを使って情報処理技術を学ぶこと ・SPSSを活用した統計処理 ・機会ある毎に情報を分析していく ・データ分析する前に再度目的を確認し、クロス集計を行う
	・結果のまとめについて、客観的な立場からの助言がほしい		・学会誌を参考に図、表を作成する ・調査研究のまとめ方については、関与したスタッフ間で文章を検討した ・文章作成では必要に応じて目的に返って考える ・文章作成において、専門家の助言を必要とした	・パワーポイントを使用する ・ポイントをしぼった資料作成
・保健所と市町村が一緒に調査・研究をすることにより役割理解がすすんだ ・他職種との共同研究は有意義 ・指導者を育成することが必要である	・指導者を紹介してほしい		・調査結果の報告は保健所の役割について理解してもらう機会になる	

表４－１　看護系大学職員の保健婦の調査・研究への支援・指導状況

調査対象１　　職　位：教　授　　教育歴：２５年　　当該機関在職歴：２０年

<table>
<tr><td>Ⅰ.保健婦の調査・研究に関する研修への関わりの状況（過去３年間）</td><td>＊研修の企画段階からの関わり：２件
・保健所地域保健研究調査事業の指導
・県保健婦自主研究グループ指導
＊研修で講師、ＧＷ援助者としての関わり
<table><tr><th>主催者名</th><th>講義名　と　内容</th><th>時間数</th></tr><tr><td>保健所</td><td>・調査研究の方法
・研究デザイン、調査計画から報告書作成までのプロセス</td><td>１２</td></tr></table></td></tr>
<tr><td>Ⅱ.調査・研究に対する保健婦（個人又はグループ）への助言・指導の状況（過去３年間）</td><td>＊卒業生（教え子）およびそれ以外の保健婦から調査・研究について求められた助言・指導
３　件（教え子３件、それ以外の保健婦　３件）
市町村保健婦　　７人（教え子　２人）
保健所保健婦　　９人（教え子　３人）</td></tr>
<tr><td>Ⅲ.保健婦が調査・研究をすすめるにあたって強化する必要があると思う能力</td><td>・看護研究に必要な基礎能力（文献抄読の機会がない保健婦が多い）
・研究課題に含まれる概念の規定、　作的定義ができる能力
・データ分析に関する基礎能力（短期に修得できる）</td></tr>
<tr><td>Ⅳ.保健婦の調査・研究の「指針作成」「研修プログラム企画」　にあたっての意見</td><td>・職場の保健婦のリーダーが、事業報告書作成にあたって、スタッフの研究能力を開発・育成する方針をもっていること
・そのために大学の教員などを上手に活用できること
・報告書作成、研究会、大学発表に結びつける
・研究成果を所内で共有し、事業計画に反映させる</td></tr>
</table>

V.保健婦の調査・研究に対する指導・助言内容（過去３年間）

＜調査・研究 １＞

テーマ：保健所の発育相談事業の評価と課題（県保健所）

調査方法：事例

	指　導　内　容	指　導　上　の　工　夫
1　保健婦の求めに対して指導したこと	・研究計画 ・調査方法 ・対象選定 ・調査票作成 ・データ分析 ・結果の分析 ・報告書作成 ・学会報告	・研究デザインの決定にあたって参考書を紹介し、予備知識をもってもらった ・各指導項目毎に具体例を示す文献、報告書などを紹介した ・論文のレジメを求め、内容を指導
2　指導者の判断で重点をおいて指導したこと	・研究目的の明確化 ・研究テーマの絞り込み ・調査方法の決定 ・報告書作成 ・県公衆衛生研究会、日本公衆衛生研究会に発表	・関連事業の評価と今後の計画における本研究の位置づけについて検討を深めた

＜調査・研究 ２＞

テーマ：市町村保健実施と市町村保健婦の現況調査（市町村保健婦協議会）

調査方法：統計

	指　導　内　容	指　導　上　の　工　夫
1　保健婦の求めに対して指導したこと	・データ分析から関わった ・データ解析の方法 ・結果のよみとり ・報告書作成	・統計調査を初めて経験するメンバーが多く、特にリーダーが初体験であった ・データをどのような図表に表したらよいか、データをどう読むか、報告書の構成、文章表現について具体的に指導
2　指導者の判断で重点をおいて指導したこと	・データ解析の方法 ・報告書作成 ・県市町村保健婦協議会研究発表会に発表	・この調査から何を知りたいか、調査目標が明確になっていないため、収穫したデータから何がわかるか整理することに力を入れた ・図表の作り方

＜調査・研究 ３＞

テーマ：乳幼児健康診査及びその事後指導の実施状況と民間マンパワーの活用について（県自主グループ）

→　全員が研究体験を持つ自主研究グループであった

調査方法：統計

	指　導　内　容	指　導　上　の　工　夫
1　保健婦の求めに対して指導したこと	・研究デザイン ・調査票の作り方 ・データ解析 ・結果のよみとり ・報告書作成	・研究テーマの絞り込みにあたって、文献抄録をした案についての助言
2　指導者の判断で重点をおいて指導したこと	・研究テーマの絞り込み ・調査票の作成 ・報告書の作成 ・県職員保健婦協議会研究集会、県公衆衛生研究会、日本公衆衛生研究会に発表	・全員が研究経験を持ち短大専攻科卒と大卒者がほとんどであったので、文献抄録に力を入れて調査票と報告書の作成に備えた

表４－２　看護系大学職員の保健婦の調査・研究への支援・指導状況

調査対象２　　職　位：教　授　　教育歴：１０年　　当該機関在職歴：４年

Ⅰ.保健婦の調査・研究に関する研修への関わりの状況（過去３年間）	＊研修の企画段階からの関わり：な　し ＊研修で講師、ＧＷ援助者としての関わり		
	主催者名	講義名　と　内容	時間数
	看護協会 職能委員会	・保健事業の評価について	５時間
Ⅱ.調査・研究に対する保健婦（個人又はグループ）への助言・指導の状況（過去３年間）	＊卒業生（教え子）およびそれ　以外の保健婦から調査・研究ついて求められた助言・指導 ２　件（教え子　　件、それ以外の保健婦　２　件） 市町村保健婦　　４人（教え子　　１人） 保健所保健婦　　人（教え子　　人）		
Ⅲ.保健婦が調査・研究をすすめるにあたって強化する必要があると思う能力	・調査統計を具体化すること		
Ⅳ.保健婦の調査・研究の「指針作成」「研修プログラム企画」にあたっての意見	・調査研究のプロセス（研究計画・実施・評価）を実際に体験できる研究プログラムが大切であると思う ・職場で手元において研究の進行状況を点検できるような内容の指針があると便利でしょう		

Ⅴ.保健婦の調査・研究に対する指導・助言内容（過去３年間）

＜調査・研究　１＞

テーマ：訪問看護サービスの評価

調査方法：統計

	指　導　内　容	指　導　上　の　工　夫
１　保健婦の求めに対して指導したこと	・調査項目について	・調査方法に問題があり、調査結果の読みとりの限界があることを理解してもらうよう助言した
２　指導者の判断で重点をおいて指導したこと	・研究目的・目標と調査項目の関連性 ・質問の仕方	・調査目的・目標、仮説の検討を調査項目を反映する必要性を理解してもらうように助言

＜調査・研究　２＞

テーマ：家族観と介護意識因子との関連について

調査方法：　事例

	指　導　内　容	指　導　上　の　工　夫
１　保健婦の求めに対して指導したこと	・研究のまとめ方、研究発表の仕方について ・研究計画書を持参して助言を求められた	・研究目的とデータ収集の方法が妥当かどうか、結果の分析方法に問題はないかなど、研究計画全体に目を向けられるように注意した
２　指導者の判断で重点をおいて指導したこと	・研究目的の明確化 ・研究方法の検討 ・データ収集と解析について助言し研究計画書の再検討をすることになった	・研究目的にそった研究方法の選択ができるように ・個別事例をデータとする時の倫理的配慮ができるよう

表４－３　看護系大学職員の保健婦の調査・研究への支援・指導状況

調査対象３

１．指導目的：市町村保健婦が地域保健婦学術研究会で研究発表を実施するための調査・研究指導

２．対象：市町村保健婦

３．講師：看護系大学教授　３名

４．指導方法・内容

研修（講義・演習）を実施後、各市町村毎に担当の教授を決め、担当の市町村毎に個別指導を実施する。

講義	研究の倫理、研究目的、計画書の作成方法、調査票の作成方法、データの収集方法、分析方法、キーワーズ等 （テーマ、目的、仮説の立て方、計画書の作成については、受講生の具体例をもとに講義を実施）
演習	グループに分けて計画書、調査方法について検討
個別指導	随時教授と相談しながら研究を進める。 電話・ＦＡＸでの指導あるいは来校しての面接での指導 指導の内容については別紙参照

５．指導していく中で気づいたこと

①学生時代の研究についての学習によって指導内容は異なるので、まず学生時代の学習内容を把握する必要がある。

②日頃から業務のまとめをやっていると、研究がやりやすい。

③業務に追われ業務の見直しがされていない。日頃の活動をまとめていくことが重要である。

④研究になると日頃から目的をもってデータをどれだけ集約しているかが問われる。

⑤保健所が調査・研究について市町村にアドバイスができるとよい。

市町村保健婦への個別指導内容

回答欄 調査・研究 プロセス	(1)保健婦が困っていること、課題と思うこと	(2)各段階で実施している指導・助言の内容 指導・助言上の工夫
A 調査・研究の意義 1. 調査・研究する必要性・意味を理解している。 2. 調査・研究の位置づけが明確である。	・問題を感じているし、考えているが、日々の業務を研究的な取り組みに移すという体験があまりされてない。 ・業務に追われていて、地域の課題、問題を考える余裕がない。	・日常的にやっていることを解決、整理することが研究そのものであることを説明。
B 問題の把握と明確化 1. 地域におきている現象・問題を感じとる。 2. 現象・問題が生じた背景、原因を把握する。 3. 問題間の関係を整理し、総合的にとらえる。 4. 問題の中から解決すべき課題を特定する。 5. 課題解決に関連するデータ・情報を収集する。 6. 文献、関係者などを通じ既知の情報を調べる。	・文献の検討ができていない。	・大学の図書館の利用 ・考えている問題をそのまま文章化してみる。
C 目的・目標の設定 1. 課題を調査・研究のテーマに結びつける。 2. 調査の目的・目標を具体的に表現する。 3. 調査・研究によってどのような結果が得られそうか予測する。	・課題が課題だけに終わってしまい、研究テーマに結びつかない。 ・研究テーマが広がってしまう。	・この部分はかなりな時間をかけて行った。 ・テーマの選定は、解決したい問題、取り組みたい事業、分析したい課題等を出したうえで検討する。 ・テーマをできるだけ絞る。 テーマを絞る時には、他の職場でも役に立つか、これまでに実施されたいない特徴があるか、今回の研究で何をどこまで明らかにできるか、研究の目的等を考慮して行う。 ・結果の予測においては、問題点を仮説に置き換えて考えてみる。
D 調査の実際 1. 研究の対象者を選択する。 2. 目的にあった調査・研究方法を選択する。 (統計調査か事例調査か) 3. 目的に応じたデータ収集の方法を選択する。 (観察法か質問法か等) 4. 目的に応じた調査表等を作成する。 5. 予備調査等の結果により方法や内容を修正する。	・アンケートの調査項目をつくるのが難しい。 ・調査内容は保健婦の観察内容なども利用できるが、アンケート調査に偏りがちである。	・目的にそって仮説を細かくたてる。仮説を細分化し、文章化していくと、それが質問項目となる。 ・質問項目については、繰り返し助言した。 回収方法、回答方法、集計方法、専門用語等わかりにくい表現になっていないか、設問の内容が意識か行動かなど。 ・アンケート調査以外でも研究できる方法を具体的に提示する。

E 結果の分析と解釈 1. 目的に応じて収集結果を分析する。 2. 目的に照らして明らかになった事柄を示す。 3. 調査結果と分析結果を解釈する。	・検定の仕方	・職場にある集計ソフトを聞き、それに応じた方法を助言する。 ・コンピューターを貸し出し、大学に来てもらいコンピューターの画面を見ながら共にやってみる。 ・分析の枠組みを明らかにしたうえで、カテゴリー化をする。 既存の調査結果を参考に、それに当てはめて考え方を示す。 ・理論、分析枠組み等にあてはめてみると、考え方が整理できる。 ・検定の仕方 ・目的、仮説に照らして、それらが結果として現れるような分析を行う。
F 結果のまとめ 1. 目的から結果まで論旨が一貫している。 2. わかりやすい、読みやすい文章・図表を作成する。 3. 報告書を作成する。 4. 結果を地域住民、関係者に報告する。 5. 結果を研究誌等に発表する。 6. 結果を保健計画や事業計画等に生す。	・文章には主観的な表現が多い。 ・結果と考察が区別しにくい。 ・考察の書き方、考え方がなかなか難しかった。 ・抄録をどう書いたらいいかわからない。 ・学会発表をしたことがない。	・目的、結果から外れないように記述する。 ・結果から何がいえるのかを明確にする。 ・強調すべき点を明らかにし、書き方に工夫する。 ・示説での発表の方法。 ・学会発表をしたことがない。 ・発表、報告にとどまらず、次の研究課題を明確にし、それも含めて発表する。
G 調査・研究のマネージメント 1. 取り上げる課題の意義を周囲に説明する。 2. 調査・研究計画書を作成する。 3. 調査・研究の円滑な実施に向け、職場内の合意形成や進行管理する。 4. 調査・研究を保健婦業務として位置づける。 5. 研究費の予算化ができる。 6. 調査・研究の指導者の協力を得る。 7. 研究的視点から業務の評価が行えるよう後輩を指導する。	・研究計画書に、研究デザイン、費用、倫理について十分書かれていない。	・研究計画書については、講義も含めてかなりの時間をかけた。

保健婦の調査・研究指導指針（案）

1．保健婦の調査・研究を実施する上で困っている・課題と思っていること（資料１）

2．調査・研究プロセスにそった指導・助言方法（資料２）

3．保健婦の調査・研究に関するＱ＆Ａ（資料３）

資料－1

保健婦の調査・研究を実施する上で困っている・課題と思っていること

	指導的立場の保健婦の判断	スタッフ保健婦の判断
A段階 調査・研究の意義	①調査・研究を保健婦の日常活動として位置づけていないこと ②調査・研究の必要性に関する認識が低いこと ③調査・研究の動機付けや姿勢が少ないこと ④保健所における調査・研究の位置づけの不明瞭さ ⑤業務の多忙さ	①調査・研究を行う意義や目的が分からないこと ②調査・研究をするきっかけがつかめないこと ③調査・研究する同意がチーム内で得ることが難しいこと ④多忙な業務の中で調査・研究する意義を見つけにくいこと ⑤担当業務と平行して実施することが難しいこと ⑥調査・研究の意義は経験をしないと分からないこと
B段階 問題の把握と明確化	①地域に起きている問題を課題として感じたり、まとめたりすることができないこと ②問題が生じた背景・原因を把握すること ③問題意識を持続し続けることが難しいこと ②業務担当制のために他の業務との関連性など総合的に把握したり、他からの情報を加えることが困難になっていること ⑤既存のデータ等から問題を総合的に把握、考えることが難しいこと ⑥文献検索が不十分であり、個人体験の域を越えられないこと	①地域で起きている現象、問題を感じ取ることが困難であること ②問題を研究的に整理したり、課題を明確にすることが難しいこと ③問題の背景・原因を明らかにするための情報・知識が十分でないこと ④業務担当制により地域の実情が把握しにくく、地域にでる機会が少なく、対人サービスの低下により地域の問題を十分に把握しないまま活動していることがあること ⑤実態調査から課題を特定することが難しいこと ⑥課題解決に当たって具体性、客観性が求められること ⑦背景となるデータ、情報収集が難しく、手段が限られていること ⑧保健所では文献検索が十分にできないこと ⑨文献入手が難しく、文献や資料による学習が不十分で多面的に行えず、保健所以外も含めて文献検索が困難であることまた、文献検索になれていないこと ⑩データの蓄積がなく、他部署からの情報収集が困難であること
C段階 目的・目標の設定	①地域の問題を研究課題に結びつけるこが難しいこと ③調査・研究の目的・目標を明確にできいため、抽象的な記述になりがちであること ③仮説が明確でなく、仮説設定をどこに置くか迷うこと ④結果の予測が十分に検討されにくいこと ⑤仮説を立てる作業を省略しがちであると捕らえていること	①感じている地域の現象・問題が研究テーマに結びつくかの判断が難しいこと ②調査・研究の目的・目標を明確にし、具体的に記述することが難しいこと ③指定の調査・研究が多いことから既に目的、目標が決められている場合が多いことから、十分に検討する機会が少ないこと ④研究の見通しがもてず、結果の予測も十分に検討されていないこと ⑤事前の情報収集が不足しており、仮説をたてることが難しいこと ⑥キーワードが明確にできないこと
D段階 調査の実際	①調査目的と調査の実際とを関連づけることが不十分であること ②調査目的に応じた調査方法、内容を選択することが難しいこと ④地域の課題を明らかにするための適切な調査対象・方法の選択、目的に応じた調査票の作成（調査内容・項目）が難しいこと ④質的研究が難しいこと ⑤疫学の知識が少ないこと	①調査目的に応じた調査方法を選択するのが難しいこと ②地域の課題を明らかにするため対象を選択しているか不安であること ③最も適切な調査方法は何かなど調査方法に対する知識・技術が不足していること ④時間の余裕がないため既存の調査方法を参考にする場合が多いが既存の調査票の入手が困難であること ⑤目的に応じた一貫性のある調査項目の作成が難しく、項目が多すぎ、偏りがちであること ⑥分析を想定した調査票、回答しやすい調査票の作成が難しいこと

	指導的立場の保健婦の判断	スタッフ保健婦の判断
E段階 結果の分析	①目的に応じた分析になっているか、分析方法に自信がもてないこと ②分析方法が経験の域を越えられないこと ③コンピューター操作に不慣れであること	①目的に応じた分析の視点、分析方法の選択、特に調査対象者が多い場合の選択が難しいこ ②分析プロセスに慣れてなく、テーマに沿った、また、課題を明らかにするための分析方法が難しいこと ③分析に当たり適切なソフトの活用や検定方法に関する知識・技術が十分でないこと ④結果のうち、どの数値を使うか、また、数値をどう解釈するかが難しいこと ⑤データの客観性の確保、客観的解釈が難しいこと ⑥他の地域との比較検討を十分に行っていないこと
F段階 結果のまとめ	①まとめ方に自信がもてないこと ②一貫した論文作成が難しいこと ⑤他職種、他機関、住民に理解できるようわかりやすい文章、資料を作成することが難しいこと	①目的に応じた一貫した論文作成が難しいこと ②第3者にわかりやすい文章、図・表の作成が難しいこと ③調査・結果を計画等に生かしにくいこと ④発表・報告の経験が乏しく、プレゼンテーション技術が不足していること

資料ー2

調査・研究プロセスにそった指導・助言方法

調査・研究プロセス	保健活動に関する調査・研究を実施する上で必要な事項	指導・助言上の留意事項	指導・助言上の工夫（必要と思うこと）
A 調査・研究の意義	1.調査・研究する必要性・意味を理解している 2.調査・研究の位置づけが明確である	○専門職として必要な研究的姿勢 ○日常活動における調査・研究的視点とその意義 ○保健活動実践を踏まえた地域の健康課題の提案 ・その根拠・データの必要性・重要性 ○あらゆる活動場面における調査・研究の動機づけ ○保健所の調査・研究機能の位置づけの明確化 ○職場における調査・研究の取り組みの必要性の共有化と経験 ○調査プロセスの段階ごとの適時・適切な指導・助言と体制整備	○日常業務の中に研究テーマがあることの認識・動機づけ ・学会誌、調査・研究報告書の積極的回覧、 ・保健所管内研修等における調査・研究発表の実施 ・担当業務の整理、課題の明確化および解決策の検討 ○調査・研究の必要性に関する検討の場の設置 ○学識者、大学等の協力による調査・研究指導体制の整備 ○職場における調査・研究の必要性の共通理解 ・上司、他職員に対する調査・研究の必要性・意義についての説明
B 問題の把握と明確化	1.地域におきている現象・問題を感じとる 2. 現象・問題が生じた背景、原因を把握する 3.問題間の関係を整理し、総合的にとらえる 4.問題の中から解決すべき課題を特定する 5.課題解決に関連するデータ・情報を収集する 6.文献、関係者などを通じ既知の情報を調べる	○問題意識の継続性 ○地域の現状、問題の研究的視点 ○担当業務と他業務との関連性など事業の総合的把握 ・既存データからの問題把握 ・文献検索、データ・情報収集の方法 ○問題の原因・背景の把握・整理方法 ○客観的・具体的な課題解決方法の検討 ○既存の資料・関係者からの聞き取り ○テーマに関する情報・資料・文献の収集と方法 ○先行調査・研究の検討	○担当業務と他事業、総合事業との関連性の検討 ○地域の健康実態の把握、問題の特定 ・問題の構造化、図式化、事例の検討等 ・チームでの問題の検討・共有化できる場の設定 ・関連統計、情報の整理 ○インターネットの活用 ○個人的ネットワーク ○保健福祉に関する年報等の活用 ○先進地の視察、学会等の参加、学会誌等の文献検索
C 目的・目標の設定	1.課題を調査・研究のテーマに結びつける 2.調査の目的・目標を具体的に表現する 3.調査・研究によってどのような結果が得られそうか予測する	○地域課題と研究課題との関連性 ○目的・目標の焦点化 ○研究目的と研究動機の関連づけ ○仮説設定、結果予測、研究の見通しについての十分な検討 ・的確な実態把握・分析、事前の情報収集 ・キーワードの特定 ・目的・目標の具体的な記述 ○先行調査・研究との比較検討 ○研究結果と保健活動の関連性	○日常の保健婦活動の中から研究テーマの選択 ○文献要約の作成 ・テーマ、目的、目標、結果の一貫性 ○研究動機、研究目的、仮説設定等の検討記録の保管 ○先行調査・研究の検討 ・調査・研究要旨、目的、結果の検討 ・該当調査・研究の意義・特徴に関する検討 ○健康・生活実態、実践活動等の地域特徴の反映状況
D 調査の実際	1.調査の対象を選択する 2.目的にあった調査・研究方法を選択する（統計調査か事例調査か） 3.目的に応じたデータ収集の方法を選択する（観察法か質問法か等）	○調査方法に関する知識・技術（対象選定、方法選択） ○調査票の作成 ・目的に沿った一貫性のある調査項目の作成 ・調査項目の適切な内容、数 ・分析方法を想定した調査票の作成	○調査・研究の進行管理（目的との関連性） ○調査対象、調査方法の選定に関する相談・指導体制 ○調査票作成の相談・指導体制 ○調査票の妥当性・信頼性の検討、調査票の添削の指導体制 ○先行調査・研究、文献、専門分野の学識者等の紹介

調査・研究プロセス	保健活動に関する調査・研究を実施する上で必要な事項	指導・助言上の留意事項	指導・助言上の工夫（必要と思うこと）
	4.目的に応じた調査票等を作成する 5.予備調査等の結果により方法や内容を修正する	・回答しやすい調査票の作成 ・先行研究での調査票等の検討 ・調査期間を考慮した内容 ・実現可能性の検討 ・課題解決に必要な内容の検討 ○地域、対象特性を考慮した内容の検討 ○予備的調査の実施と検討、修正 ○先行調査・研究の検討（調査目的、方法、対象、調査内容、結果） ○調査・研究対象機関、関連機関との調整・連携 ○調査・研究実施にあたり、予め予測される問題の対処方法の検討	○保健婦以外からも、広く意見を聴取できる場の設定 ○調査・研究関係者の検討、共有の場の設定 ○指導者、専門家等からの具体的な指導・助言
E 結果の分析と解釈	1.目的に応じて収集結果を分析する 2.目的に照らして明らかになった事柄を示す 3.調査結果と分析結果を解釈する	○統計処理に関する知識・技術 ○事例研究に関する知識・技術 ○目的に応じた分析の視点・方法の選択 ○課題が見える分析方法 ○分析にあたり必要なデータ入力の枠組み、解析方法（ソフトの活用） ○分析のためのコンピューター操作 ○結果の解釈 ・分析で取り上げる項目の選択 ・項目間の関連性（読みとり） ・仮説、結果予測との関連性 ・先行調査・研究結果との比較検討	○目的に応じた分析方法、データ解析に対する指導・助言 ○分析プロセスへの指導 ○パソコン活用の実際 ○ソフト活用の実践 ○研究結果の保健活動への反映
F 結果のまとめ	1.目的から結果まで論旨が一貫している 2.わかりやすい、読みやすい文章・図表を作成する 3.報告書を作成する 4.結果を地域住民、関係者に報告する 5.結果を研究誌等に発表する 6.結果を保健計画や事業計画等に生す	○調査・研究結果について、仮説・結果予測との関連からの分析・検討 ○調査・研究結果の周知 ・文章、図表等の表現 ・明確になったこと、強調点を中心のまとめ方 ・プレゼンテーションの知識・技術 ○保健活動への調査・結果の反映	○報告書、学会抄録等の添削 ○調査・研究で明確にしたいこと、地域特性を考慮したまとめになっているかの指導・助言 ○まとめには ・学会誌等文献、専門家の紹介 ・関係者による検討の場の設定 ・文章表現、図表に対する指導・助言、学会誌等の紹介 ○保健所管内研修等における発表の場の設定 ○調査・研究結果の次事業への反映

資料－3

☆ 保健婦の調査研究に関するQ&A ☆

目次

＜ 調査研究の目的 ＞

問1　調査研究の目的を設定するにあたり、留意すべきことは何でしょうか。また、仮説を事前に立てておく必要があるというのはなぜですか。

問2　仮説の内容とレベルをお聞かせ下さい。

＜ 調査デザインの実際 ＞

問3　調査デザインとして事前にどのようなことを検討すればよいのでしょうか。

問4　調査対象数はどのくらい必要ですか。

問5　調査数は母集団の何割くらいが望ましいですか

問6　調査対象の選択にあたっては母集団の構成（性、年齢、地区など）をどのように考慮したらよいでしょうか。

問7　調査には対照群が必要ですか。

問8　郵送法による調査で回収率が低いとき、調査の意味がないのでしょうか。

問9　調査数が少ない場合に適切な分析方法があるでしょうか。

問10　調査方法を選択する際、どのような点を検討しておけばよいでしょうか。

＜ 調査票の作成 ＞

問11　調査票作成における留意点について具体的に教えて下さい。

問12　回答形式の設定の仕方について教えて下さい。

問13　ADLに関する質問票では、たとえば、”一人で入浴ができますか”　という問いに対し、”1．介助は不要、2．部分的介助が必要、3．全面介助が必要”、の中から選択するという回答形式がよく用いられます。この解析の際、”介助不要”２点、”部分介助”１点、”全面介助”０点のように得点してよいでしょうか。また、それぞれを３点、２点、１点と得点化してもよいでしょうか。

問14　調査票における質問の回答形式として複数回答のものを採用した場合、パーセントの取り方に迷うことがありますが、基本的な考え方を教えて下さい。

問15　順序のあるカテゴリーの多肢選択の場合、選択肢を４つするか、５つにするかで結果の精密性に影響するでしょうか。

問16　フェイス・シートに盛り込むべき事項と調査票における配置について教えて下さい。

＜ 解析 ＞

問１７　統計的推論の形式には、区間推定と仮説検定がありますが、これをどのように使い分けるのですか。

問１８　クロス表についてパーセントを取る場合、縦に取るか、横に取るか迷うことがありますが、基本的な考え方について教えて下さい。

問１９　質問票では３区分の多肢選択回答形式のデータを解析する際、まとめた方が明確な結果が得られると思い２区分にしましたが、このようなことは許されるでしょうか。

問２０　回答結果について％をとるときの分母の扱い方について教えて下さい。

問２１　予想に反する結果、異常と思われる値が得られたとき、どのように考えて対応すればよいのでしょうか。

＜ 図表の画き方 ＞

問２２　数値で表わすものと図表で表わすものをどう使い分けたらよいでしょうか。

問２３　棒図表や線図表などの統計図表を画く際に、目盛りにカットを入れることがありますが、その方式に一定のきまりがあるのですか。

＜ 調査の信頼性と妥当性 ＞

問２４　調査の信頼性と妥当性とは何を指すのですか。どような要件が満たされていればよいのですか。

質問者　丸山美知子
国立公衆衛生院
回答者　福富和夫
元国立公衆衛生院保健統計学部長

☆　保健婦の調査研究に関するＱ＆Ａ　☆

＜ 調査研究の目的 ＞

問１　調査研究の目的を設定するにあたり、留意すべきことは何でしょうか。
また、仮説を事前に立てておく必要があるというのはなぜですか。

（答）　科学研究には探索的なものと確証的なものがあります。前者は仮説を探す研究であり、後者は仮説を証明するためのものです。統計調査で有用な情報をうるには目的が明確化されていなければなりません。そうでなければ、適切な対象集団を設定することも、調査項目を選択することもできないからです。すなわち、統計調査は本質的に確証的なものです。しかし、ときには探索的な場合もあります。実態調査といわれるものがそれです。どこに問題点があるかを探る調査などです。この場合は調査項目がどうしても多くなる上、肝心な項目を逃す危険もあり、あまり有用な結果をもたらさないことになりがちです。

問２　仮説の内容とレベルをお聞かせ下さい。

（答）　これは一般論としてお答えできる性質のものではありません。対象である問題に関して、できるだけ多くの文献にあたり、協同研究者と議論して問題点を絞っていくより他ありません。研究のねらいを絞り込めば込むほど、調査研究は成功する可能性が高くなるものです。

＜ 調査デザインの実際 ＞

問３　調査デザインとして事前にどのようなことを検討すればよいのでしょうか。

（答）　調査デザインとは、調査対象、標本の抽出、調査の規模、調査の内容、実査の方法などをいいます。調査対象は本来調査の目的により決まるものですが、もう一つは実際問題として調査をする際の便宜性が重要な要素になります。標本調査では標本抽出の方法が問題になりますが、大規模な調査で多段抽出などを採用するような場合は統計の専門家に相談すべきでしょう。それほどの規模でなければ母集団リスト（たとえば、住民台帳など）から系統抽出します。単純無作為抽出は通常は用いません。調査の規模、実査の方法については別にお答え致します。

問４　調査対象数はどのくらい必要ですか。

（答）　調査対象数とは実際に調査する人数のことでしょう。統計学では調査の規模といいます。全数調査では対象集団のサイズ、標本調査では標本サイズが調査の規模になります。これは調査費用と係わるので調査を企画するときとくに問題になります。

調査で大切なのことはいうまでもなく結果の有用性です。その一つは統計値の誤差が十分に小さく、統計情報を誤ることなく利用できることです。ところで、統計の誤差に標本誤差と非標本誤差があります。標本誤差は対象集団から一部を抽出して観察する、すなわち、標本抽出に基づく誤差で、これが調査数（標本サイズと呼ぶ）に関係するのです。一方の非標本誤差は標本抽出以外の原因による誤差を総称したもので、調査漏れや誤回答から転記や集計のミスのようなものまで含まれます。注意すべきは、非標本誤差は調査数と直接関係せず、たとえ全数を調査しても生ずることです。非標本誤差は別にして、標本サイズと標本誤差の関係を説明します。ここで標本サイズとは実際に統計作成に用いられたデータ数のことです。標本誤差の大きさは推定値の標準誤差で評価されます。たとえば、標本サイズをｎとするとき、高血圧者割合がｐ％であるときのの標準誤差は

$$\sqrt{(p(100-p)/n)}$$

と算定されます。標準誤差の２倍を高血圧者割合にプラス・マイナスすると、95%信頼区間が得られますが、これは区間内に真の高血圧者割合が 95%の信頼度で含まれるという意味です。信頼区間の幅が狭いほど、すなわち、標準誤差が小さいほど、精度のよい推定といいます。必要な調査数を考える際は、どこまでの精度を必要とするのか、統計をどう利用したいのか、に係わるのです。たとえば、集団特性のおおよその把握か、行政施策のために精密な数値が要求されるのか、などです。

また、統計値は、通常、性別や年齢階級別などの階層について観察されますが、そうなると各階層ごとの統計値の精度が問題になります。たとえば、男女それぞれの高血圧者割合に一定の精度が求められると、男女ほぼ同数として、約２倍の標本サイズが要求されることになります。

問５　調査数は母集団の何割くらいが望ましいですか

（答）　上の式には母集団サイズが含まれていません。標準誤差の算定には多少母集団サイズも関係しますが（これを母集団修正といいます）、抽出率が極端に高い場合をのぞけばその影響は微々たるもので、上式のように基本的には標本サイズで決まります。すなわち、何割抽出すればよいかではなく、何人抽出すべきかが問題なのです。

問６　調査対象の選択にあたっては母集団の構成（性、年齢、地区など）をどのように考慮したらよいでしょうか。

（答）　まず、用語の使い方ですが、調査対象は”抽出”するのであり、”選択”してはいけません。さて母集団の構成を考慮した標本抽出ですが、これを層別抽出といいます。あらかじめ、母集団の構成についての情報があれば、一般論としてこれを利用するほうがよいのです。各階層の情報も入手できるし、階層に依存する調査項目についてはより精度の高い結果が得られるからです。

問７　調査には対照群が必要ですか。

（答）　これは調査目的によるものです。患者対照研究のように、患者群と対照群について関連要因を比較したい場合、あるいは、コホート研究のように要因暴露群と非暴露群とを比較する場合は当然対照が不可欠になります。